
「8月32日」 第2部

九郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「8月32日」 第2部

【Nコード】

N2826Z

【作者名】

九郎

【あらすじ】

あの紙切れに書かれていたことは本当なのか？
報われない30代のささやかな願いは叶えられるのか・・・

「8月32日」 第2部 前篇

「8月32日」 第2部

まずは簡単な自己紹介から始めたいと思ったが、前作とあまり変わらないので省略する。

ただ多少の変化はあったよ。とはいってもあの出来事は現実だったのか・・・しばらくは頭から離れなかったけど。

でも日を重ねるうちにだんだんと夢の中の出来事だったのかも、なんて思うようになってたりもしたが

そのたびに例の紙切れを見ると待ち遠しくなる自分がある。

しかし現実問題としてこの時代で生きていくことを運命づけられている俺は働くことを選んだ。

つぎ、さおりんに会う時は恥ずかしくない男になっていたから・・・求愛行動ってやつかな？

そんなわけでアルバイトを始めました。なぜアルバイトかって？社員の応募はすべて断られたよ。

約2年ぶりに仕事に就いたわけだが精神的リハビリよりもむしろ肉体的なりハビリが必要だと実感した。

仕事は老人ホームでの介護です。

20代の時に保険のつもりでホームヘルパーの2級を取得していたんだが、これが役にたった。

まあ、時代が必要としているせいもあったね。

そんなこんなで朝7時には出勤です。

通勤手段はもちろんバイク！ 原付だけど・・・

前作であれだけ吠えていたくせに・・・このような意見は現在受

け付けておりません、あしからず。

30代の迷いってやつだよ、勘弁してください。

職場に着くと朝礼を済ましてすぐに入居者の食事の準備が始まる。

60人ほどの入居者の名前と簡単な病歴を覚えるのはつらい・・・

やはりなんでもかんでも20代だったな、ちよつとの後悔がある。

しかしそんな事はいつておれず似合わないエプロンをかけると、ひらがなバッジをつけ、準備完了！

お偉い社員さんの指示に従いテンポよく食事を席へ運ぶ。

「松本さん、さんとゝの食事介助おねがいします」

「はい」

食事介助・・・

ただ見ているわけではないよ。テーブルについている3人から5人の食事介助をする。

基本は完食させること。なかにはスプーンでさえ持てない方もいるからね。

では汁物から・・・とんでもない！

特に認知症の進んでいる方は大変。食器を投げたり手づかみで食べだしたりするから、とにかく隙をみせるとのど詰まらしたりなんかしてさ、顔が真っ赤になっていくんだよ。そういう時はあわてて社員さん呼んで対処していただく。さすがに手慣れたもんだ、詰まった物を取り出すとすぐに持ち場に戻る。

朝の食事だけで1日働いた気分になるよ。

休む間もなく着替えと下の世話。

おむつ替えは1人平均5分で終わらせる。でないと時間内で終わ

れない。まあ半月もすればこなせるようにはなるよ、ただ現状を知らない方にひとつ経験談を。

入居者はその多くが意思の疎通を持ってない。はいはいはなし言葉がうまく話せない、または聞き取れない。

最初の頃は噛みつかれたりモノ投げられたりしたよ。オムツ替えの時なんかは特に気を使っているんだけど、なかなか汲み取ってくれない。

ある日、下の世話をしていると、とても嫌がる方がいた。

しかし時間というノルマがある新人の俺には対処のしようが無くオムツを外しにかかった。

嫌がる理由がそこにはあった。

体調が優れなかったのだろう、食あたりかもしれない。それらが洪水のように溢れていた……

バケツ3つ取り替えて……終わった時には社員さんの罵声が飛んできたよ。ひどい話だろう!?

その社員さんは新人で俺よりも10歳下の女性だよ。

彼女もまだ慣れていなくてストレスが溜まっていたんだろうね。説明する間もなく入浴場に連れて行かれると順番待ちの方を3名ずつ世話していく。

呼吸確保しつつ洗髪し、体を洗い男性なら髭を剃ったりもする。それを終わると機械式の湯船であたため終了。

やはり1人5分ほど。すべて終わると黒い塊なんか落ちていく、よく見る光景だ。さつさと掃除しろ、といわんばかりに車いでコズかれる。

なんだろうね、これ。この実態を政府が変えない限りこの国の老人

ホーム産業は廃業だよ、まったく。

人材不足だからって素人募集して、素人が教育という名の権力を振りかざす……。世も末だね！

そんなわけで、一か月で辞めました。と、ここで意見が分かれる。

1つは良くやったよ。2つ目は根性なし。

今回、中間の意見でありそうな「なんで相談しなかったの？」は省きます。前にも言ったが上からモノ言われるのと我慢しないタチだつて……。ね！

まだまだ現状を報告したかったのですが、希望を胸にこれから働こうとしている方に申し訳ないのでこのあたりでやめておきます。

でも国や県が直接運営している所は素晴らしかった。働いている人も余裕があつたね。それを支えている豊富な知識や洞察力……。ただ遠くて通勤に嫌気がさして1週間で辞めさせて頂きました。後悔先に立たずだよ。

2つ以上採用をいただいた時は近場で働こうなんて考えるもんじやないよ。しっかり調べてからね！ あたりまえだけど。

結局、年を越してしまつたよ。

ひどい1年だった……。まあたいして毎年変わらないんだけどね！今年こそいい年になるだろうって思っていたのさ、共感できるだろうか？
できない奴は恵まれてんだよ。

多少の僻みが入ったところで前回の胃の検査報告をしておかなければいけないね。

人生初めての胃カメラ……。オエツつてなつたよ。

先生が「落ち着いたら画面見てください、見ながら説明します」なんて言つたけど、とてもそんな状況じゃない。でも4、5回オエ

ツつてなつたらだいぶ落ち着いてきた。

涙目で頑張つて画面を見ると、以外にも綺麗なピンク色でした。胃の中は薄つすら赤くはれている箇所があつてさらに下には鳥肌のような状態ができていた。

「もう少し奥まで見てみましょうね」いいながら15センチほど差し込んだよ。

麻酔しているとはいえ臓器に当たる感触はなんとも言えない。

「この辺りが十二指腸ですね」このあたりとはどのあたりか分かんなかったが狭い臓器がそうなのだろう。

「あれ？」

あれっ？ その発音つてすべての人を不幸にするよ、先生！

それでも無事に終了しました。

診察室に戻ると先生が写真を数枚ひろげた。とくに問題はなかったようだ。

いろいろと詳しく説明していただいてホッと一安心したところで「松本さん、確認のため血液検査をしておきましょうね」のひとこと。

確認？ なんの？

どうやら胃の方にはとくに問題なかったらしいが、奥の方に気になる箇所があつたらしい・・・

そう言われたら断るはずはない・・・苦手な注射を学生するときに来だったかな？ 我慢して受けたよ。

検査結果は一週間後だつて。

そんで一週間後・・・

とくに問題ありませんでした、以上！

だけど1年に1度の診察を受けてください、と優しい言葉で書かれていた。

2月22日。

俺の誕生日だ。34歳。まいった・・・確実に年をとっている。10代のころは30代って聞いたら若いオッサンのイメージしかなかったような、そんな年になってしまったのか・・・俺。

3月に入ってようやく重い腰を上げた。

ようやく就職できました！ 営業の御仕事です。はやい話が飛び込み営業です。

とはいっても現実に年収1千万を楽に超えている人も数人いる。やる気が湧いてきたよ！

ひと月だけは25万の給料が保障されるんだけど、2ヶ月目からは完全歩合制。だから1か月でみっちりしごかれる。

例のごとく原チャで出勤！ 朝9時。

朝礼から始まり今日の目標を怒鳴り声で叫ぶ！ こうしないとやる気がないと判断され何回もやらされる。

最初の頃は10回過ぎたあたりで（何やってんだ俺は・・・）
なんて思ってたやめて帰ろうかと思ってたぐらいさ。

スパルタ教育ってやつだよ。でも2週間目まではがんばった。未経験の世界だし、俺にも営業の才能があるかもなんて思っていた。

夕方6時に支店に戻ると成績発表です。もちろん契約の可能性の無い帰宅者にはロールプレイングという深夜まで続く教育という名のしごきが待っている。でもそれで契約とれるのであれば文句は無い。しかしそんな現実はあるさり叩きのめされたよ。たまたま飛び込んだ家が悪かったのかな。

月曜の10時ごろだったかな、緊張しながらチャイムを押しても誰も出ない。しかし会社のルールでは最低3回は押せ、それでも出なければドアを叩け、それでもだめなら裏口から回れ、そういう教

育をつけていた。

3回目でようやく眠そうな声の主人が出た。俺は叩き込まれた内容を順に説明したが、途中で怒鳴りつけられた。

「そんなんで起こすな、バカヤロー！」てな具合に。

謝罪してパンフレットだけでも、とポストに入れようとしたら「テメーふざけてんじゃねえぞ！」カメラ付きのインターホンだから見えるんだよ。俺は見えないけど・・・

なんとか謝って隣の家に向かうんだけどインターホン切らないで聞き耳立ててんだよね・・・

その場を離れたかったけど逃げるのもシヤクだから順にしっかりとなしたよ。

今でもその家覚えているよ。

その日からインターホン押すのが怖くなってさ、結局ひと月でやめようって思った。

その他にも嫌な人は多くいたよ。

結局人間という生き物は無駄に欲だけ持ち合わせたわがままで脳の使い方を知らない生き物だってこと。

そんなわけで残りの一週間は公園で時間つぶしたり、パンフレットだけ配ったりしてた。

「松本君、今月契約とれなかったけど、支店が声かけてくれてるから明日からそっちにいつてくれる？」

「店長、申し訳ないのですが私には向いてないようですので、できれば退職させて頂きたいのですが」

「そう、わかった。残念だけど仕方ないね、上には伝えておくから」

「はい、いろいろお世話になりました」

「はい、ごくろうさまでした」

同僚にこう言われるからこう答えて辞めればいい、という指導も受

けていたよ。

なんかというか、あっさりしているね。おかげで人間不信になったよ。

でも給料はしつかり出たよ。こんなにありがたみのある給料は初めてだった。

俺みたいに能力の無いやつは今後、どう生きていけばいいのかわからなくなったよ。

人生ってこんなものか？ 努力の仕方も分からなければ結果もついてこない。

いくつか本を読んでも都合の良いことしか書いていない。おまけにまた胃の調子もおかしくなってきた。

根本的な原因は何だろうか？ そればかり考えると、いつも行き着くところは幼少時代だ。

一番大事な時期、俺のやりたいことは全てといっても決して過言ではないだろう、否定されてきた。

世間体の良い親の望む子になってほしい、たとえばテレビはNHK以外は悪だから（サザエさんは唯一許されていた）・・・など、数え上げたら嫌になってくる。

4月に入ると再び向精神薬と胃薬のお世話になる生活がはじまった。

結局、一生報われない類の人間なんだろうね・・・。

5月に入ると世間はゴールデンウィークの賑やかさが街を彩る。

俺は気分転換にクロスバイクで遠出することにした。思い出づくりという意味合いもある。

ゴールデンウィーク最終日5日。

朝9時に家を出ると荒川の土手を目指した。30分ほどで土手まで来るとようやく信号のないサイクリングコースに出たよ。

しかし最終日ともあって公園では野球の試合やプラスバンドの練習、ヘリのラジコンに熱中するものからマラソン大会など……さまざま催しが執り行われていた。

そんな光景を左に見ながら走っていると看板が見えた。

「河口まで27キロ」

ん！？ その程度で東京湾に出るのか？ さっそく頭の中で計算が始まった。

現在午前10時を少し回ったところだ。昼には着くだろう。

ちよつと目標ができて漕ぐ足に力が入る。

「行つてやるうじやないの！」

甘かったね……。足がついていけないんだよ、トイレ休憩を兼ねて10分休む。

正直、帰ろうか迷ったよ、でも迷いはすぐになくなった。

子供達5人を引き連れて同じく東京湾を目指すグループが休憩に立ち寄ったんだ。

「はい！ ここでトイレ休憩です、10分後に出発しますよ」

俺はこのグループにだけは負けない自信が出てきた。

颯爽と走り出すと前を走る競輪選手らしき人に付いて行つた。

5分と持たなかったよ……。彼ははるか先の土手を上り終わると下つていった。

「反則だよ、原チャと変わらないじゃん……。にしてもいいケツしてんな」

いったん路肩に止めるとサドルをハンドルの高さに合わせて。

「これなら力が入るだろ！」

意気揚々と走り出すと前を走る競輪選手らしき人に付いて行った。

5分と持たなかったよ・・・モノが違うんだね。

あきらめてマイペースで行くことにした。

気づけば11時30だ。それにさっきからちらほら見えるあれはスカイツリーではないのか？ 潮の香りも増してきた。

間違いない！ 急に元気を取り戻した俺は目標をスカイツリーに変更した。

30分と経たないうちにその高さを実感したよ。

近くの土手を上がるとほぼ全貌が姿を現した。さすがに高い・・・思わず写メを撮る。ついでにGPSで距離を確認する。

「河口までもう少しだな・・・」

再び目標変更。

東京湾を目指して走ること30分。ようやく河口までの距離が1桁を切った。

残り7キロ・・・5キロ・・・

到着した俺は大きく深呼吸したよ。

なんだか無性にうれしかった。パイプの柵に肘をつきながら遠くに見える観覧車を見つめた。

おおきな輸送船が脇から現れると携帯を取り出してさっそくシャッターを押す。最大望遠にしたけど形を捉えるので精一杯だった。この距離はデジカメが必要だね。

感傷に浸っていると急にハラが減ってきた。持参した飲み物も空だ

し、近くに店は無い・・・

よし、次はスカイツリーだ！ その前に腹ごしらえ。

来た道を戻りながら土手に上がって店を探すことにした。

20分ほど走ると土手に平行して走る電車を見つけた俺は自転車を担いで土手を上がり店を探した。

さっそくラーメン屋があったが、店の前にはロードレーサーが並んでいる。

別の店を探すこと5分、繁華街でラーメン屋を見つけた。

「味噌ラーメン、お願いします」

「ありがとうございます」

さっそく来ました、味噌ラーメン！

外食するのはいつ以来だろうか？ それは期待を裏切らなかったね！

「本日、サービスで提供しています」

運ばれてきたのは3個の餃子だった。

「いいんですか？」

「はい、どうぞー！」

ここで食べた記憶は間違いなく残るよ。とにかくうまかった！

ハラも満たしたことで再びGPSで確認する。

「どうするか・・・」

俺は土手を走っていた。スカイツリーは次回の楽しみにとっておくことにしたよ。

そうそう飲み物を自販機で2本買っておいだ。まめに水分補給をしないとバテるよ。

帰りはペースを変えずにひたすら漕いだよ。

息が上がるとちよっと休憩、40分ノンストップで走っていた。整備された道でないところはいいかないよね。

再び走り出す。

この時間は競輪選手風の走る姿が目立つ。

次々に追い越されていくよ。

そうだ、選手とレプリカ君の違いを覚えておいてあげるよ！

- 1、追い越すときは2メートル以上の間隔をあける。
 - 2、あまり脇見をしない。
 - 3、とにかくペースを乱さない・・・とにかくはやい！
- 以上が本物。

次にあげるのはレプリカ君。

- 1、やたら寄せる。自慢げに自転車を見てもらいたいという願望。
- 2、追い越すときに少しペースを合わせる。相手の自転車を見下す。
- 3、ジロジロみながらニヤついて走って行く。
- 4、2人以上で走っている。

とまあ、こんなところかな。一言で片づけるならオーラがあるかないか。

素人でも足見ればわかるよね。まあ、個人的な意見だから気にしないでくれ。

ようやく帰宅すると3時30分を回っている。

足はガタガタだよ。無茶したのは自分でもわかる。明日は歩けないだろう……

プチひきこもり生活送ること3ヶ月。気がつけば半袖、短パン。

その日は再び痛み出した胃の検査を受けるべく病院に向かった。再びの胃カメラ。

2度目とはいえ、やはりオエツってなる。そこで血液検査。

検査結果は胃炎でした。かなり荒れているらしく麻酔薬を含む薬を薬局で出された。

それから3日後、病院から連絡があった。どうやら胃の下あたりに何かあるらしく精密検査が必要とのこと。

都内の病院を紹介されたよ。最悪の事態なんだろうね、きっと。

まあしかし、たいした希望も楽しみも無いし……あまり動揺しなかつたな。

次の週の月曜日。不安に駆られながら支度を整えると家を出た。

8月15日 午後2時。

地下鉄を降りて地上に出る階段をあがる。電気の熱で発せられる独特の匂いが押し上げてくると地上から降りてくる喧騒の匂いが入りまじる。

久しぶりの都会に足を踏み入れると社会人にもなった気がする。見上げるほどのビルが立ち並び格差を目の当たりにすると、とたんに自分の立場を再確認する。

すれ違う人たちは決めたスーツを着こなしている。若いころはス

「ツで仕事に向かう人を見てつまらない人だな、などと思っていたがいまや憧れの対象になっっているとは・・・」

病院は駅から10分ほどでついた。

やはり見上げるほどの高さだ。

病院の自動ドアが開くと薬の匂いが鼻を突く。これは全国共通らしい・・・

案内板を見て内科を探すと、3階に大きく書かれていた。

近くに階段を見つけ3階に向かう。左右の手すりはリハビリをしている方が使っているので真ん中を失礼する。

3階の広いロビーにはすでに多くの患者が順番を待っている。傍らには健康講座のビデオが流れているがあまり見ている人はいない。

受付を済ませてその講座の前に座る。ガンについての内容だ・・・タバコはガンになりやすい、飲み過ぎる酒も同様、睡眠不足、それらにたいして過剰なストレスが長い間かかると健康な人でもガンになる。要はストレスがすべての根源だっということらしいが、これは事実だろう。

「松本さくん、松本あきらさくん」

館内放送で呼ばれると指定されたドアへと進む。軽く緊張しながらドアに入る。

「松本さん？」

「はい、よろしくお願ひします」

「どうぞ、お座りください」

「失礼します」どこぞの面接よりも緊張してきた。

血液検査、レントゲンなど一通り済ますと診察室へ戻った。

「では来週の月曜日に来てください、そのときに結果を説明しま

す

「はい、わかりました……」どうやら今日は検査だけだったよ
うだ。

「来週まで待つのか……長いな」

ロビーのソファに腰かけて会計を待つあいだ、健康講座のビデオ
を見ていた。

出入り口の自動ドアが開くたびに都会の匂いで鼻をいやす。思わ
ず深呼吸したよ、なんかいい気分だ……

地下鉄の入り口まで来るとビルを見上げ都会の空気を吸い込み電熱
の世界に入ってしまった。

やはり運動不足だ……階段を何気なく降りてもふくらはぎが張
る。年のせいもあるだろうか？

これだけの階段を降りる機会は俺の人生の中でもあまりない。あ
るとすれば高校の修学旅行で京都に行ったときくらいだ。空気や景
色は違うが……

角張ったコンクリートの螺旋階段を下りて行く。が、こんなに下り
るものか？ 初めて来たとはいえ確か4階くらいだったような気が
する。

もう1階ほど下りたころだった。電熱の匂いではなく甘い香りが下
りてきた。

「あつくん!!」

忘れていた記憶とともに全身が震えたよ。

ゆっくり振り返ると……だれもない。どうやら薬のせいらし
い、今朝も向精神薬と胃薬を飲んだ。そのせいかも。

苦笑いしながら次の階段に向かうと「どこ見てんの〜!?!」手

すりに寄りかかっていた女性がいた。

「・・・さおりん!？」

「おひさです〜!」

とびきりの笑顔で手を振る彼女は以前と雰囲気が変わっていた。

リクルートスーツにお決まりのバッグ。黒い髪をうしろに縛り、形の良い耳からうなじにかけて艶のある肌、首筋のラインは鎖骨にかけて白黒の凹凸が輪郭をなぞる・・・妄想せずにはいられないよ、まいった。目線はちゃんと胸元に行くよう計算されている。

パツと見は誰が見ても面接に行く格好だが・・・

「さおりん!？ ほんとに!？」

「さっ、電車が来るよ! 急いで!」

そういうと俺の腕を掴んで階段を降りはじめた。

「ちょっとまって!？ どこに行くの?」

「あれ〜 これから準決勝戦ですよ〜」

「はい!？」

「待って今日は・・・」

「未来時間ってやつですね〜!」

強引に引つ張られ、そのまま地下鉄のホームに出るとタイミングよく電車が到着した。

2人が乗ると扉は合わせたように閉まる。乗客は誰もいない・・・以前の状況を思い出すとイスに腰を下ろした。

「さおりん、準決勝って・・・」

「そうですね〜 忘れていました〜?」

「過去に戻るってこと？」

「そうですね、この電車は過去行きです。」

「だめだよ、調子悪いし・・・たぶんやられちゃう・・・。」

「大丈夫、さおりんがついてるよ。」

さおりんは俺の顔を両手で包むとそつと胸に引き寄せた。

「あつくん、心配しないで。」

これを幸せと呼ぶのだろうか。

つぎはパチパチと頬を叩かれた。

「大丈夫ですか？ わかりますか？」

視界に映ったのは年配の看護師だったよ・・・

どうやら会計を待っているあいだに少し眠っていたらしい。

「あつ、はい！？ だいじょうぶです、すみません・・・。」

「松本さんですよ、御会計できますか？」

会計を済ませると車いすのおばあちゃんが笑って手を伸ばしていたよ。

お兄ちゃん、いい夢でも見ていたんだね、だつてさ。

俺はおばあちゃんに愛想笑顔で返すと病院を出た。

「たしかにいい夢だったよ・・・準決勝はたしか、10月だったよな・・・。」

去年の10月には何も起きなかった。そうすると今年だろうか？
それとも千年後だったりして。

8月18日

朝食後にゆっくり新聞を読んでいると電話が鳴った。その時間には俺しかいなかったから仕方なく電話に出た。それは都内の病院からだった。

「松本さん、検査結果が出まして・・・」

翌日8時、検査入院のため着替えを詰めたバッグを持つと両親に付き添われて家を後にした。

病院につくまで両親とはあまり口をきかなかった。というより何を話せばよいのかもわからなかった。

そんな感じのまま病院に着いた。

さっそく診察室に呼ばれると先生が書類を整えていたところだった。

「急なことで申し訳なかつたです」と先生が言った。

「詳しいことは検査をしてみないとはいつきりとは申せないのですが・・・2、3日様子をみてみましょう」

「先生、俺ガンですか？」

俺の問いに両親の顔を見ながら眼鏡のブリッジを押さえた。

「多少の疑いはありますけど同じような患者さんにも同様にしていますのでそんなに心配することはないでしょう」

俺には言いなれたセリフに聞こえたよ先生、『たぶんガン』それ以外にないでしょ・・・

「では、お部屋にご案内します」

6人部屋の、入ってすぐ右手に準備されているベッドだった。簡単に先生から今日の予定を言われた。さつそく検査を始めるらしい。

両親は他の患者に挨拶をすますと「また明日くるから・・・」そう言って帰っていった。

さつそく血圧、血液採取、レントゲンなどを終わると部屋に戻った。

「お兄さんは何で？」となりの爺さんが聞いてきたよ。

「ええ、検査入院です」

「そうか、若いのにな」

おい、まだ死ぬと決まったわけじゃないよ！

ガラガラと昼食が運ばれてきた。

献立はご飯のおかずには白身魚の煮つけ、豆腐の味噌汁、ホウレンソウの御浸し、ごぼうと人参のきんぴら、デザートにヨーグルトがあった。

全体的に味気なかったが俺がつくるものと大して変わらなかった。

午後はゆっくりと昼寝をしたよ。こんなに落ち着いて寝られたのは久しぶりだ、というより記憶がない。

薄茶色のカーテンに包まれながら天井を見ていると時間が止まっているようだ。1人でニヤついているとサーツとカーテンが開いた。

「松本さん、血圧を測ります」

夕食を済ませると静かになった病院内を回ってみることにした。

昼間の騒がしさはどこにもなかった。唯一テレビの音が漏れているくらいだ。

この感じ、どこかの閉店前の温泉街に似ている。

たしか・・・そうだ、あれは限定解除をとってすぐバイク店に駆け込み、同じく免許を持っていた友人と日光までツーリングに行く

た時だ。

その日は2人で近場を流していた。2人のバイクは揃ってニンジャの750Rだった。彼は赤、俺は青のカラーだった。

昼過ぎにコンビニに入ると缶コーヒーを買って外に出た。

「これからどうする？」俺が聞いた。

「たまにはどっか違うところ行きたいね」彼が答える。

ちようどそのときZZR1100が入って来た。彼はタンクバッグをつけていた。

「こんにちは」メットをとった彼は白髪頭の似合う凜々しい中年だった。

「こんにちは、1100ですか」

「ええ、あと10歳年食ったら乗れないからね、たぶん」

「そのころはハーレーあたりですかね？」

「間違いないだろうね」笑いながらいうとコンビニに入っていった。

コーヒーを飲み干した頃に彼がコンビニから出てきた。

「ここから奥多摩までどれくらいかな？」彼は奥多摩に行くらしい。

「そうですね、『それ』なら2時間とかからないでしょうね」

「そうか？」

ニツとしたのをみて聞いた。

「今日はどちらからですか？」

「ああ、佐野から」

「栃木ですか」

「そう、この時期はどこも走りやすいよね！　あまり観光客もいないからさ」

「そうですね、紅葉もまだだし」

俺たちは国道4号を北上していた。ガソリンが空になるまで走り続けたよ。

宇都宮を過ぎたあたりでガソリンスタンドに寄り満タンまで給油する。

「いろは坂もこの時間なら空いているでしょ」

「そうだね、じゃあ中禅寺湖までどう？」

「乗った！」

スタンドを出るとそれがスタート合図だ。

120号を走って『いろは坂』の看板が見えてくると徐々に興奮が増してきた。

ほんの少し前を走っていた俺は第2いろは坂入り口手前で路肩に止めた。

「やっぱり観光しなくなったよ」

「そうでしょ！　俺もそう思ってた！」

明智平でポーズを決め写メ撮って再び走り出す。

中禅寺湖に着いた時には5時をまわっていた。

「なんか寒いね・・・」薄着で来たのをちよつと後悔したよ。

さすがに5時を過ぎるとはやくも土産屋などは看板を下ろし始めていた。

「店、閉まつちやうんじゃない!？」

「ねっ、どっかで飯食おうよ」

「急いだ方がいいかもね」

俺たちは駐車場の完備されている比較のおおきな店に入った。

「すみません、まだ食事出来ますか？」

「どうぞ、どうぞ」

「ここは何時までやっていますか？」

「うちは7時ですけど、でもどこもその時間には閉めますね」

山菜うどんに天ぷらそばを注文した。待つあいだ、客は1人も入ってこなかった。

店に入ったとき5組いた客も6時過ぎると俺たち2人だけだった。

「田舎時間ってやつかな・・・」

「なんかさみしくなるね」

「人口が多いっていうのも悪くないかも・・・」

あたたかい食事でも心も満たされると次は眠気におそわれたよ。

「金払ってでもいいから車で帰りたい」彼がそういうと俺も頷いた。

会計を終えて外に出るとシンと静まり返っている。

日光は本日の営業を終了いたしました、なんてアナウンスが聞こえてきそうだったよ・・・

翌日は早朝の採血から始まった。

まだ7時だ、こんな寝起きの状態で注射を打たれるのは、重要会議の朝にでも目覚まし時計がとまっていた時のあの心拍数に近いだ

ろう、なんて。

午後はこれまた初めてのMRIだ。が、これは肉の輪切りしか思いつかない……

そんなこんなで1日が終わった。

次の日は問診だけだった。

その次の日も、またその次の日も。

さすがにちよつとした疑問が頭をよぎったよ。俺はたしか検査入院のだけのはず……

問診の時に先生に尋ねた。

「先生、俺いつ検査入院終わるのですか？」

先生は問髪置かずに答えた。

「今週いっぱい様子を見て、検査結果が出たらその時予定を組みましょう」

にこやかな笑顔で肩を軽くたたくと隣の患者さんに声をかけた。

「調子はどうですか？」

「ああ、夢ではあさんが早く来いって手招きしていたよ」

「アハハ、そうですね。でも私の方が先にお会いするかもしれませんね」

「先生よりわしゃ、若い子が気の毒で」チラツと俺を見たよ。だから勝手に殺すな……

入院生活は最初の頃は慌ただしかったが、やがてやることなく暇になった。

一週間経つても結果が出ず、先生は細胞がどうたらこうたら……と難しい専門用語で話す始末だ。

予想通りというか、おおよその見当は確信に変わっていったよ。

次の日から食後に薬を与えられるようになった。

「これ、何の薬ですか？」看護師に聞く。

「これは血液をきれいにする薬です」そう答えた。「食後に必ず飲んでください」

病院で出される薬だ、飲むことに間違いはないのだろうが腑に落ちない。

詳しい説明もないまま言われた通り飲み始めたよ。

それから1週間後。

あいかわらず退屈な日々を送っていた。変化といえば俺の前にいた患者がいなくなり、新しい患者が入って来たぐらいだ。

中学生の男の子。細身ではあるが身長は俺より10センチ高い。顔は面長だが整っている。

彼は何の病気で入院してきたのか興味があつたが誰とも口をききたくないといった風だった。

ただ彼は1日中、本を読んでいた。それも時事本ばかり・・・高校受験のためか、はたまた将来は政治家か？

その日の夜はなぜだか寝つけなかった。

おそらく入院生活にどっぷりと浸かってしまったのだろう。時計を見ると午前1時を過ぎていた。

のどが渴いた俺は1階にある売店の自販機でお茶を買い、誰もいないロビーで半分飲んだ。

窓から柔らかい月明りが差し込んでいる。

「松本さんですよ？」

突然の問いかけにホラー映画を思い出したよ・・・やさしく囁くよ
うな声だった。

振り返るとあの中学生が真後ろのソファ―に座っていた。

「びっくりした・・・いつから居たの!？」

「いま来たところです」

「そう・・・」

俺は正門を後ろに座っている。もちろん正門は嚴重に閉まっているし厚手の白いカーテンで閉められている。

俺はすぐ左手の階段を下りてきた。右手側はメイン通路になっていて階段はずっと先だ。要するに俺の目に留まらず後ろに座るというのは不可能なんだよ。

「ニンジャみたいだ」俺は皮肉を込めて言った。「何か飲む？」

「いいんですか？」

「いいよ、好きなの選んで」

俺は自販機で、どれにする？ いいながら500円玉を入れた。

「では、その赤いのを」

「赤いの？」俺は赤い缶の飲み物を探した。ちょうど月明りが自販機に反射して背景をとらえた・・・

ゾクツ！ としたよ・・・どっかで見たことのある化け物が映っていた。そう懐かしくない匂いとともに。

俺は反射的に隣の自販機に移った。振り向く間もなく500円を入れた自販機に見事な穴が開いていたよ。

「さすがは予選突破者だ・・・」突っ込んだ穴から手を引き抜いた。

そいつは化け物ではあったがどこか以前の奴とは雰囲気が違う・・・そう、全身が金属繊維だ。ステロイドビルダーではない、人間の

形ではあるが表情はない。

「なにっ!? だれ!?!」思わず腰が抜けた。「なんだよ!?!」
階段の手すりに手をかけなんとか踏ん張った。

夢だろうか!? 目の前に筋骨隆々の中学生がいる。その体は月明りをうけ乱反射している。

「まつもとあきら」カタコトの日本語だよ。
バチバチと自販機がショートして消えた。

「そうだ、お前・・・なんだ!」何を言っているか俺もよくわからない。

「ころす」音程のかわらない言い方で返してきた。「まつもとあきら」

宇宙人がこいつは? 「まで、俺は病気だ! もうすぐ死ぬ! だから殺す必要はないだろ!?!」

ぎこちない歩き方で1歩1歩近づいてくる。「おまえはしなない、だからころす」

「なんでそんなことわかるんだ!? 医者か!?!」言ったあとでアホな質問をしたと思った、どうみても医者には見えない。

「までよ! なんで俺を殺す必要がある!?! お前はだれだよ!?!」
それには答えずに腕を振り上げた。

やばっ!

俺は階段を這いあがって逃げようとする奴は俺の右足首を握った。

気がついたらロビー中央まで投げ飛ばされていたよ。どうやら脇腹を強く打ったみたいだ。

「イテテ、夢じゃないなこれ」なんだかおかしくなってきたよ。

「やるゝ ぶざけやがって」

立ち上がった俺はメイン通路を走り出した、とにかく誰かに気づいてもらえば奴は手を出してこないだろう。

俺はあの紙切れに書かれていたのを思い出した。「まだ10月じゃない、なんだあいつは!？」

やつは追ってこないのか？ 振り向くと同時に奴の顔がそこにあった。

「うわっ!」とつさに距離をとると近くに整理されていたパイプ椅子を掴み投げつけた。

まあ、そんな都合よく当たるわけない、階段を目の前にして追い詰められたよ。

「こういう状況のときは正義の味方が必ず現れるもんだろ!？」

「せいぎのみかた」奴が復唱した時だった。

階段から飛びかかった人が奴を押しつぶした。

さて、さて・・・どう考えてもこれは現実ではないよ。とうとう俺の頭がイカレたらしい。

俺の目の前で奴と格闘しているのはあの化け物だ、なぜ？ 幻覚か？

化け物が奴の首を掴みあげるとソファアームに叩きつけた。もちろんソファアームは粉々だよ。

そのまま力任せに首を引きちぎった。

化け物が振り返ると俺と目が合った。

「松本晃・・・なぜこいつらがお前を消したがるのか」

言っている意味が分からないよ、しかしなんとなく知的な化け物だ。奴がモゾモゾと動き出すと俺の視線に気づいた化け物は右手の5

本の指を伸ばし奴の両足、両腕、胴と刺し動きを封じた。頭は首と
かろうじてつなぎとめていた金属繊維が元の位置に戻すべくうねっ
ていた。

化け物がおもむろに取り出した黒い石をそいつの胴に落とした。
よく分からなかったがその石は奴を一瞬で黒い灰の塊に変えた。
化け物は石をとり、しまつと徐々に人間の姿に戻っていった。

「誰だ、あんた！？　なんで」言いかけたがそいつに見つめられる
と頭の中が真っ白になり俺は意識を失った……

続く

「8月32日」 第2部 前篇（後書き）

後編・お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2826z/>

「8月32日」 第2部

2011年12月9日23時52分発行